

---

# 運命の腕時計

大空翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命の腕時計

### 【Zコード】

N2178BA

### 【作者名】

大空翔

### 【あらすじ】

兄貴からプレゼントされた腕時計が僕に生きる意味を教えてくれた。  
そして僕の人生はどう使っていくか。

## 僕の生きる意味

なんで僕はここにいるのだろう。  
何のために生きてのだろう。

僕の名前は、ケイタ。二十歳。  
現在入社二年目のサラリーマンとして、毎日同じように働いて、ただ生きていた。

今している仕事にもあまり興味がなく、趣味や好きなものすらなく、なにも考えずただ生きていた。

そんなある日、こつものよづか、ただ働いていたとき、上司から「あんた、やる気あるの!」と言われた。  
「あります。」とつぶやいて答えた。内心、その場で辞めます、と言いつかつた。

そう思いながら、そのまま仕事を終えた。

死にたい・・・・・。

家に帰ると、

「おかげり。」母親がいつも通り優しく僕を迎えてくれた。

台所には夕飯の用意がされていた。

服を着替えて、すぐにご飯を食べた。

「仕事辞めたい。」

少し落ち着いたとき母親に話した。

「あんたの人生なんだからあんたで決めなさい。」

そう一言僕に言った。

「いいからそつさま」

僕は部屋に戻った。

なんで生きているのだろう・・・。

ベッドの上で

そう想いながら、目を閉じた。

死にたい・・・。

ふと気づくと、朝になっていた。時計を見ると、まだ4時だった。  
もう一度寝ようと思つてみたが、珍しく目がパチリしていた。なんとなく散歩に行きたくなり、家の扉を開け、外に出た。

外は、まだつすら暗く、静かだった。本当に誰もいない世界みたいに静かだった。

「朝つてこんなに静かなんだな」  
と思いつつ、近くの公園に行つた。

その公園は昔、よくあそんでいて、すゞく懐かしかつた。

ふと遊具のほうを見ると、1人の女性がいた。  
見た目はショートカットが似合つ目がクリツとした可愛らしい女の子だつた。

「こつもこんな時間にここにいるの？」

と聞きたかったが、シャイな僕には無理だつた。

「邪魔したらマズイな」  
と思い、公園を出ようとした。

「ちょっと待つて」  
と女の子が話しかけてきた。さつきまで遊具のほうにいたのに、いつの間にか

僕の目の前にいた。

「あなた今、死にたいと思つてるでしょ？」  
と、突然僕に言った。

「そんなことないよ

当然死にたいとは言えず、嘘をついた。

「私は、死にたい」

いきなり彼女が言った。

いきなり「死にたい」とか言われて、僕は驚いたが、  
「なんで死にたいの？」と尋ねた。

「だつて生きていたつて辛いだけだし、死んだほうが楽じゃん。」

僕と同じ考えだ。

そして彼女が言った。

「ケイタも死にたいのなら一緒に死のう。」

僕はまた驚いた。

いきなり一緒に死のうって言われても心の準備ができているわけない。

僕は少し考えた。

二分間沈黙が続いた。

そして、僕は口を開いた。

「いいよ。」

彼女はそう聞くと、嬉しそうに

「じゃあこのナイフで死のう。」

と僕に渡してきた。

僕はまたまた驚いた。

まるで僕がくるとわかつていたかのように用意されていた。  
よく考えると、なぜ僕の名前を知っているかななど、いろいろ疑問点  
があがつた。

しかし、僕はそんなことは気にせず

「わかった。」

と言い、ナイフを受け取った。

いざ死のうとナイフを握ると、手が震え、身体が死にたくないと言つてゐるようだつた。

「どうして震えてるの？」 そう彼女が僕に言つてきた。

「怖いんだよ。」

「じゃあ私が殺してあげる。」

今にも泣き出しそうな声で僕は言った。

彼女はそう言つて僕に襲い掛かってきた。

「やめてくれー！」

僕はこの静かな世界で叫んだ。

彼女はそんな言葉は聞かず、僕に襲い掛かってきた。

「死んだ。」

と思つたとき、よくこの公園で一緒に遊んでいた大好きだった女の子を思い出した。

そうすると、彼女の動きが止まつた。

「なんだ。あんたにもいるんじゃん。大切な人。」

彼女はそう僕に言つてきた。

「こんなところで命をするんだつたら、その女の子に命をかけてやりな。」彼女はそう言い残すと、僕の前から姿を消した。

「一体なんだつたんだろう。」と思つた瞬間、辺りが騒がしくなつて、

この静かな世界が消えた。

「ケイタ。起きろ。」

「はっ！…」

僕は目がさめた。

夢だったのか・・・・。

「寝ぼけてないで、さつと支度しろ。」

そう言つてくるのは、僕の兄のトオル。

トオルは成績優秀、スポーツ万能、人望も厚く、みんなの憧れだつた。

「今日は時計買いにいくんだろ。早く支度しろ。」

「わかったよ。」

今日は僕の誕生日プレゼントとして、珍しく時計を買つてくれると  
いうことだった。

「用意できたよ。」

「よし！じゃあ行くか！」

「気を付けてね。」

と母親が見送つてくれて、僕たちは出かけた。

「あ、ケイタ。久しぶり！」

そう声をかけるのは、幼なじみのコトエ。僕の大好きな人だ。

「どうに行くの?」

「ちょっと兄貴と買い物してくる。」

「珍しいね。行ってらっしゃい。」

と、さらつと話し、僕たちはバス停へと向かった。「おまえ、友達は大切にしろよ。」

急に兄貴が言つてきた。

「そんなの当たり前じやん。」  
と言い返した。

「自分の命もな。」

兄貴がボソッと呟いた。

「えー? なに! ?」

僕はわざと聞こえないふりをした。

「何でもねーよ。」

なんで兄貴がそんなことを言つたのかな。  
昨日の夢のこと知つてているのかな。

ま、いいか。

バスに乗り、目的の場所へと、たどり着いた。

こんなところ時計屋さんなんてあつたっけ！？

疑問に思いながら、店の中に入った。

店の中に、見たことのない時計がいっぱいあった。

「どの時計がいいかな」

僕が店内の商品を見ていた。

「おまえに買つてやる時計はもう決まってあるんだ。」

「そうこうと兄貴は一つの時計を指差した。

その時計は、黒一色と

とてもシンプルなデザインであった。

「シンプルでいいね。」

僕がそう言つと、兄貴はまた、僕に聞こえないような声で

「おまえは何のためにこれを使うー！？」

「兄貴、なに言つてるの？」

「あー、ごめん。これいいよな？」

兄貴は何かを隠すようにこの時計を購入した。

「はい。誕生日プレゼント！！」

「ありがとう。」

「大切に使えよ。」

このときから、僕の人生が大きく変わり、僕が生きている意味を知ることになった。

## 兄貴の生きる意味

時計屋さんでの買い物も終わり、2人で帰りのバスを待っていた。ぼーっと向かい側を見ていたら、どこかで見たことのある女性が僕を見ていた。そして、僕に何か言つてゐようつて見えたが彼女はすぐにいなくなってしまった。

「彼女誰だっけ？」

と思つていると、バスが到着した。

「ほり、行くぞ。」

僕たちはバスに乗った。

「ねえ、兄貴はなんで僕にこの時計をプレゼントしてくれたの？」

「そのうち、わかるわ」

「そのうち？」

「ああ、そのうちな。」

そのとおりでもないやつて思つていただが、そのうちはすぐつづってきた。

「あぶない……」

運転手が対向車を避けようとハンドルをきつたがスリップして橋から落ちてしまった。

「本当に死んだな・・・。  
まあいいか。」

と思い、目を閉じた。

「ケイタ!!!」

「兄貴?」

「おまえの人生、そんな簡単に決めてしまつていのか!!!」

「俺はおまえが本当に生きている意味を知つてほしいんだよ。だからこれをプレゼントしたんだ。これからその答えを俺に見せてくれ。」

「はっ！」

気が付いたら、僕は病院にいた。目の前に母親が泣きながら僕を見ていた。

「おまえよく生きていたね。」

なにを言つてゐるかよくわからなかつた。

近くに新聞があつたので、見てみた。

「バス橋から転落、爆発」とかかれていた。

「思い出した。

そうだ。兄貴は？」

母親にきくと、泣きながら何も喋らなかつた。

そうか・・・・・。

そのあと、話を聞くと、兄貴だけ発見されなかつたらしい。僕はバスとは離れた遠いところで見つかつたみたいだ。そして、兄貴からプレゼントされた腕時計を握つていていたみたいだつた。

生きていたのは僕だけだった・・・・・。

僕は怪我一つしていなくて、ただ氣を失つていただけだつた。兄貴の最後の言葉、なんの意味があるんだろう。・・・そして、なんで僕だけ無事だったのだろう。・・・



## 時計の力

あの事故から、一月が経つた。

いまだに兄貴が言ったことが理解できない自分がいた。

会社も少し落ち着くまで休んでいいよ。と言われ、

一月ほど休みをもらつた。

「休みっていつも、やることないな。」

好きなことも趣味もない自分にとって、本当に退屈な休みであつた。  
そんなとき、ちょうどいいタイミングで、お誘いのメールがきた。  
1人が好きな僕だったが、遊びにいくことにした。

メンツを聞いてみると、比較的仲のいい友達で遊ぶことになつた。

結局集まつたのは、4人で、その中には、コト工もいた。

そして、4人でカラオケ行つたり、ゲーセンで遊んだりした。  
比較的楽しく過ごせている自分が意外だつた。

そして、最後は「飯を食べにビルの十階にあるレストランに行つた。  
そこのレストランは個室に別けられていてとても高級な雰囲気を出  
していた。

料理もおいしく、最高な一日だった。

今日みたいな日がずっと続けばいいなと思つていた。

そんなとき、また悪夢がやってきた。

レストランが騒がしくなつてゐるのに気づいた。  
個室にいた僕たちは外を見てみた。

レストランが炎に包まれていた。  
厨房から出火したのだ。

「みんな逃げる！…」

客が大慌てで非常口から逃げ出した。

「僕たちも逃げなきや。」

個室から外に出ると、そこはもう火の海になつていて了。

「ヤバい。逃げ場がないよ。誰か助けて！…」

どうやら、取り残されたのは僕たちだけで、助けも呼べる状況ではなかつた。

「こんなところで死ぬなんて嫌だよ。」

みんなが泣き始めた。

僕も死を覚悟した。

しかし、なんだか感じたことない気持ちになつた。

「死にたくない！！」

上から焼けた建物の一部が僕たちに落ちてきた。

「いやーーー！」

「死にたくないんだ！！！」

すると、腕時計が光り始めた。

黒一色だったデザインが金色に輝き出した。

「なんだこれはーーー！」

僕は驚いて、上を見てみると落ちてきた建物の一部が空中で止まっていた。

よく見たら、周りの炎も止まっていた。まるで、時間が止まっているようだ。

「何が起きているんだよ。意味がわからん」

「それがあなたのお兄さんがくれた力よ。」

聞き覚えのある声が聞こえた。

後ろを見てみると、こないだバス停で見かけた女性だった。誰もいないはずのこの場所に彼女はいた。

「なんであんたがここにいるんだよ。てか何者なんだよ……。」

「私の名前はカナ。あなたと同じ時計を持つものよ。」

「同じ時計って、この時計はなにか秘密があるのか……今起きていることは、この時計の力だつて言つのかよ。」

「やうよ。」

「この時計には時間を止める力があるのか。」

僕は、半信半疑で聞いてみた。

「そのとおり。でも、それだけではないんだよ。時計をよく見てみなさい。」

僕は時計を見てみた。

すると、今までなかつた数字や小さな時計が中で時を刻んでいた。

「なんだこれは……。」

「それはあなたの寿命を表したものよ。時間を止めるとあなたの寿命が減っていくようになつていてるのよ。」

今、小さな時計には 68 128 と示してあった。

「これが俺の寿命か！？」

「そうよ。てか、早くここから逃げなくていいの？命がもつたいないわよ。」

「そうだ。こいつしている内に寿命が減ってるんだ。早く逃げて、時を進めないと。」

そして、僕は3人を連れて救助が来れるところまできた。

「てか、どうやって時間を戻せばいいんだよ。」  
と考えていたら、時間が戻った。

「あれ？ いつの間にこんなところにいるの？」

3人はとても不思議そうだったが、無事逃げることができた。

「とりあえず、良かつた。」と思い、時計を見てみると、小さな時計に 65 228 と刻んであった。

「これが俺の寿命か。。。大分減ったな。まあいいか。」

これから、この力をどう使っていくか、そして何故兄貴はこの力を僕にくれたか、何よりあの女性は何者か多くの疑問があるが、とりあえずもう少し人生頑張ってみるかと思えるようになつた。

僕の生きる意味をこれから見つけていこうと思つ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2178ba/>

---

運命の腕時計

2012年1月5日19時51分発行